

小学六年生の秋頃、クラスの不細工な女子に告白する遊びが流行った。

六年生のクラスには三、四個のグループがあって、その内のひとつは塾つながりのグループだった。小学生と中学生を同時に見ている規模の大きな進学塾で、悪い中学生に影響された雰囲気の違いやつらが、悪い遊びを思いつき、時々問題を起こしていた。この遊びを思いついたのもそいつらだったのだが、多かれ少なかれ、小学生にはみんな残酷なところがあって、いわゆる優等生みたいなやつなんてひとりもいなかった気がする。本当はいたのかもしれないが、大人になった今ではまったく記憶に残っていない。しいて言えば、俺がそうだったかもしれない。その俺にしても、心の奥底では言いようのない暴力性を暖め続けていて、中学三年の夏に野球部のキャプテンをぶん殴って左腕と肩骨を粉々にして頭に七針縫わせるまで、くすぶり続ける暴力の炎が生む熱を、外へ逃がす方法をまるで知らなかっただけなのだ。子供はみんなずる賢くて、無意識のうちに息抜きの方法を思いつき、無慈悲に正確に実行する。

ともかくクラスの不細工な女子に告白するわけだが、最初は言い出しっぺの眼鏡でチビでお調子者の塚本（仲間内では悪いビデオの影響でヘンリーと呼ばれていた）が、不細工女の席の前に突然現れて、バン！と机の天板を叩いてメロドラマでお決まりの台詞をクラス中に響き渡る大声で言い放った。

「好きです僕と付き合ってください」

不細工女は嬉しいよりもドキドキするよりもただ戸惑って「え……」と絶句し、その休み時間中一言も発さず、当然返答もないままで終わってしまった。これだけなら「なんだつまんねえ」ってことになっておしまいだったはずなのだが、放課後になって不細工女が、塚本が他の友達と一緒にいるところへぼてぼてと歩いてきて「よう考えたけどやっぱり無理やで、ごめんなさい」と頭を下げていったので、塚本たちは爆笑した。

「なんやヘンリー、ふられとるやんか」と平村が言った。

「ほんなら、次はお前や。明日はお前が告白せい」塚本は平村の頭を肘で小突いた。

「そんなんして、ほんまに付き合うことになってもうたらどうするんよ」と高林が言った。

「そしたらセックスでもなんでもしたらええんや。恋人なんやし」と松田が言った。

あんな不細工としないわ。と誰かが言ったが、その声にはどこか冷たい温度が混じっていた。必然的に、しかし唐突に叩きつけられたセックスという言葉によって、その瞬間その場にいた全員に、緊張が共有されていた。

不細工女の美咲は、美咲という名前のわりに美人ではなく、それが余計に彼女の不細工感を高めているのだが、当時からしてみても決して不細工というほどの不細工ではなかった。目が細く、肌が焼けやすく、笑うと目尻にくしゃっと皺が寄る、歯並びが悪いだけの女の子なのだ。鼻筋はすつと綺麗でそれが顔全体のバランスを整えているので、見ようによっては儂げな印象さえ与えてくれる。胸も目立つ方ではなかったがちゃんと膨らんでいたし、彼女とのセックスは想像できないほどおぞましいものでは決してなかった。

平村が告白して玉砕したら今度は高林が告白して玉砕し、次に松田が告白して玉砕して

少年野球のグループに移り、笹田、佐々木、岩品、伊東が相次いで告白して玉砕すると、次は当時流行っていたゲームをガチで遊んでいた俺たちのグループの番だった。

鈴木も山口も田口も玉砕していいよ俺まで順番が回ってくる頃には、はっきり言って最初の勢いや盛り上がりは残ってなくて、またやってるよ、といううんざりした思いと、俺もやったんだからお前もやれ、という恨みがましい同調圧力がその負の駆動力になっていた。

俺は鈴木と山口に囃されて、仕方なく美咲の右肩を後ろから叩いた。

「ちょっといい？」

肩を叩かれた美咲は一瞬びくっと身体を跳ねさせてから、驚かされたことへの恨みを含めるようにして、振り向いて俺の顔を睨んだ。

「何？」

「例のやつ」と俺は言った。「お前が好きだ」

美咲は目を丸くした。「マジ？」

「マジ。俺にも回ってきた」と俺は正直に言った。

美咲の反応ははっきり言って意外だった。これまでみんな二言目には断られて、存在ごと黙殺されて何事もなかったようにされていたのだ。だがその意外な展開を注意深く見ているやつなんて、もはや誰もいない。俺と美咲がどうなろうと知ったこっちゃない。何番煎じかも分からない茶番に注意を払うほど暇なやつは、小学生であろうとしないのだ。

「じゃあ分かった」と美咲は言った。「放課後校門の前で待って」

グループに戻ってしばらく黙っていると、別の話をしていた鈴木が思い出したように聞いた。

「さっきの告白、どうだったん？」

「なんかオーケーもらった」と俺は言った。

「は？」

鈴木と山口と田口は、信じられないものを見る目で俺の方を見た。俺は少しだけ鼻が高かった。

その日の放課後になって、俺と美咲は二人並んで下校した。二人は長い間無言だった。置き勉をしているせいで羽のように軽いランドセルの肩紐が、背中にすれてきゅきゅと鳴る音がイヤに耳障りだった。

「あのさ」俺は辛抱しかねて言った。「なんでオーケーしてくれたん？ その、告白」

「別にオーケーはしてないやろ」と美咲は言った。「ただ、今日一日だけなら一緒に帰ったろってうだけやで。まさかあんたから告白されるとは思ったらんで、驚いてしもうたんや」「ああ、そうなんや」と俺は言った。勘違いをしていた自分が恥ずかしく、顔が熱くなった。

「そんなら、どうして俺とは帰ってくれる気になったん？」

「家の方向が一緒やからかな」と言って、美咲は笑った。「それに、あんたって結構まじめクンやろ？ 意外だったんよ、こんなわけわからん流行りに乗って、うちに告白してくるな

んて」

それから俺たちはまた無言になった。一時間早く授業を終えて家に帰った低学年の学生が、鞆も持たずに走って行くのにすれ違った。小学校の校庭でサッカーでもするのだろうか。俺も昔はよくやった。昔？ 今思えば二年か三年など、そう昔のことではない。この頃は、一年一年の時間の流れが、驚くほど重大なものだった。

「ほんまはな」美咲がぼつりと言った。「いつかオーケーしたろと思ってるんや。告白」

「は？」と俺は言った。「告白って、誰の？」

「誰でもええんや」と美咲は言った。「ほら、うち不細工やんか。こんなわけの分からんゲームみたいなもんでも、告白されるんはチャンスやんか。どうせこれから一生、こんな機会ないんや。せやったら、いっぺんくらい、遊ばれてみるのもええんとちゃうかって、思ってるんや」

俺は美咲の顔をまじまじと見た。「ほんまか？ ほんまに、ただ遊ばれるだけやで。そこに愛はないんやで。おまえは、ほんまにそれでええんか？」

「ほやけど、じゃあ愛ってなんや？」と美咲は言った。「あんたは、愛について何か知ってるんか？……答えてええ。言われても分からん。うちは何も知らん。でもな、何も知らんまま死ぬのは嫌や」

死、という言葉のスケールの漠然とした大きさに、俺は何も言うことができなかった。少年の日の後悔。どうして俺は、このとき美咲を引き留められなかったんだろう？ 家の前で手を振りながら、向こうの角を曲がるまで手を振り続けてくれた、細目に皺の寄った笑顔を、俺は何度も振り返ったのに。

翌日、松田の二度目の告白に「二回告白してくる人はいなかった」とかいうわけの分からない理由で美咲はオーケーを出し、俺のときとはうって変わって、クラス中が沸き立った。

松田と美咲は二人並んで校門を出て行って、俺はいつも途中まで一緒に道を通るはずの美咲の姿を、その日だけは見かけなかった。美咲は松田の家のある方角の道、俺や美咲の家がある方角とは真反対の道を進んでいき、細くて薄暗い路地に入ったところで、初めてのキスを経験し、松田の家の二階の奥の松田の部屋のベッドの上で裸になって抱かれた。ぴたりと閉じた女の筋を松田のごつごつした指先で無理矢理に割り開かれ、舌で舐り回された挙句乱暴に挿入されたのだ。

松田がその一部始終を大声で自慢げにべらべらと言い触らしている間、美咲は家の布団で熱だか頭痛だか精神的ショックだかに浮かされていつ醒めるともない眠りにについていて、二週間ほど学校を休んでいた。二週間後には何もかも元通りになり、松田と美咲の交際関係も自然に消滅したようだったが、ひとつだけ変わったことがあった。美咲が学校に化粧をしてくるようになったのだ。

それから三年後の夏、俺と松田は同じクラスになり、二人そろって文化祭の実行委員をすることになった。三つの小学校の卒業生が集まる公立の中学校で、塾グループの塚本と平村

と高林がそろって私立に進学する中、一人だけ残った松田は、同じ小学校の卒業生である俺と、友達というほどでもないが、何となくよく話す仲になっていた。俺は松田の前では美咲の話をしないようにしていた。

しかしその実行委員の二人だけの集まりで、松田は美咲の話をし出した。

「小学生の頃さ、美咲っていたじゃん。あの不細工女」

俺も松田も、この頃になると方言混じりの話し方が抜けていた。抜けたと言うよりは、意図的に話さなくなっていたのかもしれない。

「俺、そいつとセックスしたことあるんだよ。俺の家、ちょうど親いなかったからさ、部屋に連れ込んで、脱げて命令したんだ。美咲も最初はためらってたけど、ちょっと脅したら脱ぎ初めてさ。女のシャツって、良い匂いするんだよね。今でも覚えてる。肩紐が細くてさ、肩が見えてて。意外と白かったよ、あいつの肩。そんでパンツ。男のブリーフと違って、つるんとしてて、ゴム引っ張って中のぞいたけど、毛も生えてなかった。んで見てたらさ、すっげえむらむらすんの。むらむらっていうか、腹の空気が薄くなってく感じ？ 息苦しくてさ、心臓ばくばくして、で、俺美咲を突き飛ばしたわけ。でさ、そこから何があったかあんま覚えてないんだよね。俺無我夢中で。あいつの身体、全身触りまくって、胸も揉んだし、あそこも舐め回して。で、入れたんだけどさ、すっげえ硬えの。きつくて、ぜんぜん動いたもんじゃなくて、それでも無理矢理動いてたら、血が出てくんのね。俺の部屋のベッドのシート、白かったからさ、すっげえ目立って、だから俺ふざけんって、美咲の顔殴ったんだよ。そしたらさ、なんでか分かんないけど、あそこの滑りが良くなって、血が出たからかな？で、とにかく最後までしたね。美咲泣いててさ。うざかったから泣きやむまで殴って、家の少し先の角まで連れてって、また殴って、そんで帰らせた。こうやって思い返してみると、俺、けっこうすげえ体験してんだな。そう思わねえ？」

「美咲はそのことを誰にも言わなかったのか？」と俺は聞いた。

「美咲さんだろ。お前の彼女じゃねえんだから」松田はからかうように言って、けらけら笑った。「言うわけねえじゃん。言ったらまた殴るって、脅してあったんだから。友達と遊んでて土手から自転車で転がり落ちたとか、そういう風な話になってるはずだぜ。まあこれでもさ、俺、手加減したし、骨も折れてないはずだぜ。痣にはなったかもしれないけどな」

俺は二週間後に帰ってきた美咲が、化粧をしていたことを思い出した。当然、小学校は化粧禁止だった。担任は美咲に何も言わなかった。

「どうして今その話をしたんだ？」と俺は言った。

「お前、美咲のこと好きだっただろ？」と松田は言った。「いつ話してやろうかって思ってたんだよ。聞きてえだろ？ こういうの」

俺は弾かれたように立ち上がり、椅子の背もたれを右手で掴んだ。それを持ち上げると言うより投げつけるようにして、松田の身体の左半分に叩きつけた。

鈍い音に混ざって金属の板がたわむ情けない音が、二人だけの教室に響いた。松田が横向きに倒れ、目だけで俺を見ていた。その身体の上に、踏みつぶすように、二度、三度、椅子

を叩きつけた。

俺の腕は鞭のようになった。椅子の側面のぼつぼつとしたネジの突起がこめかみを窪ませ、H型の足が肩胛骨を抉り、床板を掘り返しながら校舎を揺らした。駆けつけた数学教師が何事かを怒鳴り上げ、俺の背中を蹴り飛ばしたとき、空には血のような夕日が高く上がっていて、グラウンドからは笑い声がしていた。明かりの消えた薄暗い室内で、丸時計が時を刻む。もう帰れない、少年の日の思い出。離れて行く、汚れていくばかりの日々。

「お前のことが嫌いだ」床に寝そべったまま、俺は言った。誰に向けた言葉だったのか、今はあいまいで、輪郭さえも掴めない。